

# 新渡戸稲造が 後輩たちに語ったこと

——感性を育んだ札幌の atmosphere

大学文書館 井上高聡



来札時の新渡戸稲造(後列右から2番目)、左に宮部金吾、右に南鷹次郎。前列はそれぞれの夫人(1909年、附属図書館蔵)

一九〇九年六月十二日、東  
北帝国大学農科大学(北海  
道大学農学部の前身)の図書  
館で、新渡戸稲造が学生に向  
けて、三十年前の札幌農学校  
生時代の札幌の心象を振り  
返った講演を行なった。病氣  
療養のため札幌農学校教授  
を辞し、札幌を離れてから十  
年以上が経っていた。

「諸君が札幌に来ていられ  
て利用すべきは気候だ。冬で  
もそうだ。冬も決して嘆ず  
べき気候ではない。次はネー  
チュア [nature] だ。これを  
夢でなく利用せよ。この榆の  
木が手近にある。唯名も知  
らずその利用法も知らずに  
見て居てもアンコンシアスイン  
フリーエンス [unconscious  
influence]…無意識的に受け  
る影響」がある。」

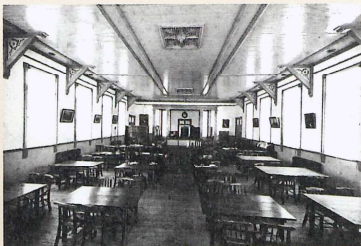
新渡戸は、農学校生時代に

札幌の気候や自然から知ら  
ず知らずに感化を受けていた  
と語っている。そんな中で時  
に血気に満ちた口論を交わ  
しながら、宮部金吾ら同級生  
と友情を深めていく。

「友達ともよく議論をした  
ものだ。その果には悪口な  
ど言ったこともあるが悪いと  
思えば謝った。宮部君とも  
よくやったものだ。併し後か  
らは謝った。……こういう風  
にフレンドシップによって少  
しづつ善い方に善い方にと進  
歩した。つまりアトモスフェ  
ヤ [atmosphere: 空気] がよ  
かったのだ。札幌の伸び伸び  
したアトモスフェヤを吸って  
北海道の天然の豊なところ  
を利用し、諸君が伸び伸びと  
発達せられんことを希望す。」

新渡戸は、気候・天然・空  
気などをキーワードに、札幌

農学校在学時代に自分を包  
み込んでいた札幌さらに北海  
道の風土が、自身の感性をし  
なやかに育んでいった様子を  
情感豊かに後輩たちに説いて  
いる。八月から附属図書館  
本館で新渡戸稲造関係の展  
示が始まる。アジア、アメリ  
カ、ヨーロッパと世界中を飛び  
回った国際人新渡戸稲造の  
足跡をたどりながら、この大  
先輩の若き日々を育んだ空  
気を、私たちも思いっきり呼  
吸してみよう。



新渡戸が講演を行なった図書館、建物は現存する  
(1905年、附属図書館蔵)